# がくろく！　～高等鬼ごっこ～

静野　たける

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

**注意事項**

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
がくろく！　～高等鬼ごっこ～

【Ｎコード】
Ｎ４９６９Ｊ

【作者名】
静野　たける

【あらすじ】

「初心に帰って鬼ごっこをしよう」

いきなり放たれた幹広のこのせりふ。

これで今日の放課後は決まったんだ。

## （前書き）

読み切りです。

内容は全然たいしたことない気がしますが

お付き合いくださいませ。。。

「初心に帰って鬼ごっこしないか？」

僕たちの放課後はいつも、この芦原幹広（あしはらみきひろ）の一言によって決まる。

「鬼ごっこって、ずいぶん懐かしいものだな・・・」

そういって若干呆気にとられているのは小路歌夜（こうじかや）。ちなみに幹広と歌夜は僕よりひとつ上の学年。

「なつかしくなんかないさ。俺たちはまだ１７か１８。たかだか十数年前に帰っただけだ」

自信満々！といった風にふんぞり返る幹広。それに僕、越高和緒（こしたかかずお）は苦笑する。

「・・・十数年あったらけっこうじゃない？」

そういうしかなかった。幹広のなかではもう決定しているだろうから、何を言っても無駄なのだ。歌夜もそれを分かっているから「やれやれ」としかいわない。

そして幹広の思い付きを助長するのがこの２人。

「いいねえいいねえ鬼ごっこ！久しぶりだなあ、俺ジマンじゃないけど足にゃ結構自信あるぜぃ？」

なんていいながら手首と足首をプラプラ振っているのが小路太祐（こうじたすけ）。

僕と同じ年齢で同じ２－Ａだ。

「小学校以来だね！・・・あれ？あたし中学校ん時も学校中使ってやってたわあ！」

そういって上を向きながら豪快に笑うのが鹿村晴々（しかむらはれはれ）。学年は同じで隣のクラス、放課後集まる僕たちのことが気になって最近一緒に過ごし始めてる。
皆の反応を満足そうに見渡しウンウン頷く幹広。

「サイコもそれでいいか？」

そういって歌夜の隣でこの雰囲気を楽しんでいるように柔らかく笑っていた臣上切子（おみかみさいこ）に確認する。
これもいつもの流れ。

「うん、いいですよ」

にこりと笑い了承する。ちなみに切子は僕たちと同じクラス。
僕と幹広、太祐と歌夜、それに切子は幼稚園のころからの友達だ。
小学校、中学校と一緒に過ごしていき、高校で鹿村という新しい仲間ができた。
そして皆がなんの予定もない放課後や休日はこうやって過ごす。学校で何かやることもあれば、街に繰り出してバカ騒ぎすることもある。

「よし、男女別れてじゃんけんだ！それぞれ負けたやつ1人ずつで鬼な」

「「「「「じゃーんけーん・・・ぽんっ！」」」」」

そんなわけで始まった鬼ごっこ、開始5分も経ってないのに僕といえば・・・

「はっ、はっ！・・・ああもう！」

「ほーほっほっほっほ！カズくううううん？諦めて鬼なっちゃいなよう！」

運悪く鹿村に見つかりただいま逃走真っ最中だったりする。

「始まってすぐ鬼なんてごめんだあああああ！」

そういって僕は全力疾走。初っ端から捕まるとか、負けた気分では収まらない。

走って走って走った。その甲斐あってか鹿村の追跡は逃れることができた。「あっ！ちょ、まあああ！」なんて叫びも聞こえたが、それに耳を貸しては捕られる。

「・・・ふう」

長い廊下を走りぬけ、体育館への連絡通路で一息つく。放課後で人は少なくはなったがまだ部活で残っている生徒はいる。そんな生徒は僕たちが騒いでいるのを、ああ今日は学校か。なんて感じで見守りつつ声をかけたりかけなかったり。ある意味だが名物化していた。

そんなふうに残っている生徒に話しかけられそれに対応していると

「ずいぶん余裕でいるものだな。和緒」

そういって腕を組みながらこちらに歩み寄る歌夜。
無愛想で大人っぽい顔立ちの歌夜は他の生徒にとっては少し近寄りがたい存在らしく、それまでいた人らは話を切り上げ部活に戻っていった。

「ちょっと休憩・・・。鹿村に追いかけられてさ」

そういってはにかんでみる。それに歌夜も微笑み返してくれる。

「ふふ・・・そうか。それは散々なだな」

そういいながら僕の隣に座る。僕もそれに倣い座ることにした。
いつも6人でいるからか、こうして歌夜と2人で話すのは久しぶりだったりする。
僕たちはちょっとの間鬼ごっこも忘れ昔話中心に盛り上がっていた。

「太祐はクラスではバカやってないか？」

「やってるやってる。クラスでもバカだよ」

それを聞いて頭を抱える歌夜。弟のバカな所業はそれだけで眼に浮かぶらしい。

「歌夜も、少しはクラスに馴染まないと。今も幹広にベッタリなの？」

「なっ？ベッタリなんかじゃない！断じて！」

この否定はベッタリだな、なんて思った。友達つくりを諦めて僕たちと一緒にいればそれでいい、歌夜はそう思ってる節があるのだ。

それが僕は少し心配だったりする。
そんな流れで、僕たちの話題が尽きることはなかった。だけども、外部からの介入によりその時間は幕を閉じることになる。

「あーっ！カヤちんもカズくんもだめだよ！鬼ごっこしないで話してちゃ！」

小さい身体で飛び跳ねながらこちらに叫ぶ鹿村。あのままだったらあやつが鬼だ。そう思って立ち上がって逃げる準備をする。しかし歌夜は余裕の態度だった。

「ああ、鬼ごっこだったな」

「いや、歌夜・・・早く逃げないと」

「そうだな・・・はい和緒。タッチだ」

・・・・・・・・・？
はい和緒。タッチだ。
つまり・・・・・

「歌夜が鬼だったの？！」

「ああ、私としたことが。晴々に遅れをとるときもあるものだな」

わーい、なんていいながら学校に逃げる鹿村。
じゃ、頑張れなんて肩をポンと叩いて歌夜も走り去る。

「まさか、鬼ごっこでだまされる羽目になるとは思わなかったよ」

人気が少なくなった連絡通路で誰に話すわけでなく声が響いた。

そのあと、だまされたのと同じ方法で近くにいた太祐（ばか）をだましタッチ完了。

今度は自分の教室に避難してみた。始まりの場所なら誰もいない、そう思ったからだ。

しかし思わぬ先客がいたりするわけで

「切子、なんでこんなとこに？」

教室にポツンと一人佇んでいる切子。ゆっくりとこちらを振り返りポヤンとした顔でこちらに笑いかける。

「ぎゃくてんの発想です。スタート地点なら誰もこないと思いまして」

考えることは同じだった。切子は頭がいい、こんなバカばっかやる僕たちと一緒にいながら毎回学年１０位以内をキープしてるほどだ。

・・・まあ僕らのリーダーこと幹広は毎回１位だが。（バカを発案する幹広が何故あんなに頭がいいのかは１０年来の謎だ）

そんな頭のいい切子と同じ考えなのだからしばらくは大丈夫だろう。

「そっか。ていうか鬼ごっこなんて久しぶりだよな。小学校のときとか切子はうまく逃げてたよな」

特にやることもなく切子に話しかける。切子も１人では退屈だったらしくこちらに寄ってきて一緒に話すことで退屈を消すことにしたらしい。

「そうですね、いつもこんな感じでした。わたし足は速くないので」

「僕だって速くはないけど・・・切子ほどじゃないか」

それを聞いた切子がプクーっとほっぺたを膨らませる。多少気に障ったらしいがそんなまじめな動作が微妙に可愛くて僕は思わず吹き出してしまった。

「ぷっ！なにその顔？」

「むう、すねてますという表現です。笑うとこではないのです」

「はは、ごめんごめん。まあ足なんて速くなくてもいいじゃん」

なぐさめるようにそういう。だけど切子はそう思わないらしく首をフルフルさせる。

「足遅いと、いろいろ不便です」

そんなに不便か？そう思ってそのまま疑問を口に出す。

「へえ？たとえば？」

「お昼休みに売店に行っても無駄足です。体力測定はいつも最低ランクです。それに」

それに？僕はそこに続く言葉が気になり聞き返す。

「鬼ごっこするときも、正攻法では勝てないから策に興じるしかありません」

「はは、そんな大げさな。・・・ん?策って?」

まあ、この時点で嫌な予感は少ししていたさ。

「それは・・・はい、カズくんタッチ」

そういって、いつもどおりポヤンとした表情で僕の肩に手を置く切子。

「・・・切子さん。この手はまさか」

「はい、カズくんの鬼だったりします」

・・・やはり。というか、切子のやってること全部鬼の行動ではなかったぞ!

「切子、逆転の発想でここにいたんじゃ?」

「ぎゃくてんにぎゃくてん、さらにぎゃくてんを重ねた結果。ただ待つという行為は気長に魚を待つ釣りという行為に進化しました」

・・・教室に入った時点で僕はかかった魚だったというわけか。

健闘を祈ります、そういって親指を立てながら教室を後にする切子。

ちょっと泣きそうになったが、まだ終わってない!

ここからこの僕、越高和緒(こしたかかずお)の逆転劇だ!

そう意気込んで切子とは逆の方向に走り出した。

「はい、終了ー、ならびに成績発表ー!」

幹広のその宣言で今日の鬼ごっこが終わる。
そして成績発表・・・

「1番捕まらなかった逃げ上手さんは・・・歌夜、1回！」

その声で歌夜は勝ち誇り笑う、他の5人はすげえ、すごい、おめでとう！なんていいながら拍手している。僕も拍手はしてるが、気が気でない状況だった。

「続いて1番鬼になった鈍足バカは・・・カズ、6回！」

やっぱりか。
おお、どんまい、おめでとう！なんていいながらこっちにも同情の拍手。
普段あまりおおっぴらに笑わない歌夜の嘲笑のような笑顔がめちゃくちゃ印象に残った。

「姉ちゃんが笑うときって、素直にこっちも笑えないよな・・・」

太祐のその呟きに僕たち5人は人知れず同意していた。

学校を出て10分、帰り道のコンビニに僕たちはいた。
買い食いしたり、発売した雑誌を買ったり。皆思い思いのものを買って駐車場の隅に集合する。

「じゃあ、はい。歌夜、おめでとう・・・」

最下位は1位になにかおごる。それもルールなので僕は歌夜に1本60円の「がるがるくんアイス」をおごった。先に言っておくが歌

夜の注文であって僕が言い出したわけでない。

「ん・・・ありがとう」

そういってはにかみながらアイスを食べ始める。まあ、６回捕まればしょうがない。そう思ったらすぐに立ち直れた。

「まあ今日はカズのドンケツだったが、明日はわが身ってやつだ。次どうなるかわからねーぞ?」

にしし、と笑いながらフランクフルトにかじりつく幹広。
それに笑い肯定する鹿村と太祐。切子はというとチョコを食べるのに夢中のようだった。

このほんの少しだけピントのずれた日々が僕たち６人の日常なんだ。ちょっと変哲のあるこの生活、僕はそれに満足してる。
そしてそれは、まあ幹広と歌夜が卒業するまでは変わらないだろう。

コンビニでの会合を終えそれぞれ帰途に着く。
僕と鹿村以外は帰り道が同じなので手を振りながら、また明日!といって４人で歩く。
鹿村とも別に帰り道が同じではないので僕も歩き出す。

「カズくん、また明日ねっ!」

元気良く手を振り回す鹿村。それに楽しい気分になりながら僕も手を振り返し家路につく。

・・・このとき気がつかなかったが、鹿村の顔はすごく哀愁を帯びた、寂しそうな顔だった。

自分の家族が住むアパートメントに帰る。
学校に比べれば全く刺激はない。ご飯食べて、風呂入って寝るだけ。だけど寝る時は少し楽しい。ベッドの上で明日はどんな楽しいことがあるかとワクワクしているのが、ささやかな楽しみな時間だからだ。

横になりながらそんなことを思い描いていると、最高の気分で僕は夢のまどろみに全てを預けたまま、次の日を迎えることができるのだった。

## （後書き）

がくろく！

お付き合いありがとうでした。

あまり満足はいってないです、もうちょっと、楽しくいけたはずなのに・・・

とかいってもしょうがないので、少しでも楽しんでいただけたのなら幸いです。。。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4969j/

がくろく！　～高等鬼ごっこ～

2011年1月27日00時21分発行